文末・連体修飾節におけるテイルの用法の習得研究

陳　建瑋

1．はじめに

日本語のアスペクトにおいて、文末と連体修飾節ではル形とテイル形の使用は必ずしも同じではない。例えば、下記の（1a）～（3a）において、文末ではいずれもテイル形のみが容認されているが、連体修飾節の場合、（1b）ではル形もテイル形も容認され、（2b）ではル形のみが容認され、（3b）ではテイル形のみが容認されるという違いがある[1]。

（1）a. 現在、両親はニューヨークに{*住む／住んでいる}。
　　b. 現在、ニューヨークに{住む／住んでいる}両親。
（2）a. あの子の行動はいつも{*馬鹿げた／馬鹿げている}。
　　b. あの子はいつも{馬鹿げた／*馬鹿げている}行動。
（3）a. 今その人は私のコートを{*着た／着ている}。
　　b. 今その人が{*着た／着ている}コートは私のものだ。

このように、連体修飾節におけるル形とテイル形の使用の規則は文末の場合とは異なるため、日本語学習者にとって混乱しやすい。そこで、本研究では文末と連体修飾節におけるテイルの使用状況について考察した。その結果、学習者は文末のル・テイルの選択基準を連体修飾節にも適用していることが明らかになった。

[1] 本稿では「スル」と「シタ」を合わせて「ル形」と呼び、「シテイル」と「シテイタ」を合わせて「テイル形」を呼ぶことにする。また、連体修飾節における「ル」と「タ」の使用の違いについても興味深い研究テーマであるが、これについては別稿で論じることにする。

2. 問題の所在と研究の目的

これまで日本語のアスペクトに関する習得研究は少なからずなされてきた。これらはテイルの用法別[2]の習得難易度に焦点をあてたものが多い。このうち、テイルの基本的用法とされる「動作の持続」（例：彼は本を読んでいる）と「結果の状態」（例：ドアが開いている）の2用法を比較した研究では、調査方法や対象者などに違いはあるものの、いずれも「動作の持続」よりも「結果の状態」のほうが習得困難であることが報告されている（黒野 1995；許 1997；Shirai & Kurono 1998；菅谷 2003, 2004a；小山 2004）。また、「結果の状態」よりも「動作の持続」が先に習得されるのは、学習者の母語に関わらず普遍的な習得順序であることも指摘されている（許 2000；小山 2004；菅谷 2004a）。一方、テイルの基本的用法のみならず、派生的用法（「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」）も検討したものでは、各用法の習得難易度は各研究によって異なる結果が出ている。しかし、概ね「動作の持続」は「結果の状態」よりも習得されやすく[3]、「パーフェクト」（例：あの人はたくさんの論文を書いている）は各用法の中で最も習得困難であるという結果が得られている（許 1997, 2000；菅谷 2002, 2004b；陳 2012）。

以上のように、日本語学習者のテイルの習得に関しては既に多くの研究成果が出されている。しかし、これらは主として文末におけるテイルの習得状況について調査を行っており、連体修飾節におけるテイルの用法別の習得に関する研究は許（2009）しか見当たらない。許（2009）はLARP at SCU[4]を使用し、3年半にわたってすべての作文データが揃っている6名の学習者[5]を対象とした。テイルの用法を8種類[6]に分け、文末のテイルの習得について論じた許（2005）の結果と照らし合わせ、文末と連体修飾節におけるテイルの用法別の習得順序が一致するか否かを縦断的に考察した。その結果、各用法の正用の出現時期の

---

[2] これまでの日本語のアスペクト研究では、テイルの多様な用法について研究者によってその分類が異なっているが、特徴づけには大きな違いがない。大別して「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」の5つの用法に分けられる。詳細は 3.1 節を参照。

[3] ただし、菅谷（2002）の OPI の事例調査では、3名の調査対象者のうち、フランス語母語話者では「結果の状態」の正用率（100%）が「動作の持続」（正用率が 50%）よりも高く、ロシア語と英語母語話者では「動作の持続」と「結果の状態」の2用法の正用率（100%）が同じである、という異なる結果が出ている。

[4] LARP at SCU は“Language Acquisition Research Project at Soochow University”の略称で、台湾の東呉大学で作成された作文のコーパスである。詳細は許（2009）を参照。

[5] 許（2009：63）は「すべてのデータ揃っている学習者は他にもいるが、テイルのある連体修飾節を使用した文脈が少なく、分析不可能だと判断したため、本研究では取り上げないこととした」と述べている。

[6] 許（2009）では、連体修飾節におけるテイルの用法を「運動の持続（±長期）」、「性状(±可変性)」、「繰返し」、「結果の状態」、「状態の変化」、「運動の効力」の8項目に分けている。

早さと頻度に基づき、連体修飾節におけるテイルは「運動の持続（±長期）」[7]が最も早く習得されるが、他の用法はあまり現れておらず、文末でのテイルと一致した傾向が見られなかった、ということが報告されている。しかしながら、許（2009）の6人のデータに「運動の持続（±長期）」以外の用法の使用はあまり出現していないため、いったいそれらの用法は習得されていないのか、もしくは単に使用されるコンテクストがなかっただけなのかが判断できない。このように、各用法の比較検討が欠如しているため、連体修飾節においては「運動の持続（±長期）」が最も早く習得される用法であるか否かを検証する必要がある。また、許（2009）では連体修飾節におけるテイルの用法別の正用しか提示されておらず、誤用については議論されていない。さらに、連体修飾節における議論に止まっており、文末と連体修飾節の違いについては言及されていない。

そこで、本研究では文末と連体修飾節におけるテイルの用法別の習得状況を検討する。その際、学習者の日本語レベルの違いによる変化についても考察する。

3. 研究方法

3.1 テイルの用法の分類

本研究では文末と連体修飾節での日本語のアスペクト形式「テイル」の表す意味について、次の5つの用法に分ける（吉川 1976；工藤 1982、1995；寺村 1984；副島 2007）。

基本的意味：

a. 動作の持続　　（3）彼は英語を学んでいる。
　　（4）英語を学んでいる小学生が多い。

b. 結果の状態　　（5）服が汚れている。
　　（6）汚れている服は水につけておきなさい。

派生的意味：

c. パーフェクト　　（7）息子は既に高校を卒業している。
　　（8）既に高校を卒業している方の応募も受け付ける。

[7] 許（2009）の言う「運動の持続（＋長期）」とは例文(ⅰ)のように長期的動作を表すもの、「運動の持続（－長期）」とは例文(ⅱ)のように一時的動作を表すものを指す。
(i)　母子家庭のうち、働いている親で転職を希望しているのは25%である。
(ii)　店に立ち読みをしている人がたくさんいる。

d. 繰り返し　　（9）彼は毎朝コーヒーを飲んでいる。

（10）毎日コーヒーを飲んでいる人は脳卒中リスクが低下する。

e. 単なる状態　　（11）彼の書いた論文が優れている。

（12）軽油よりもバイオ燃料の方が優れている点が多い。

aの「動作の持続」とは、(3)(4)のようにある基準時において動作・出来事が継続していることを表す。つまり、基準時以前に動作・出来事が始まり、基準時にも終わらずに進行していることを表すものである。一方、bの「結果の状態」とは、(5)(6)のように動作・出来事は基準時以前に起こっており、その結果がある状態として基準時まで残っていることを表すものである。cの「パーフェクト」[8]とは、(7)(8)のようにある設定された時点において、それよりも前に実現した運動が引き続き関わり、効力を持っていることを表すものである（工藤 1995）。dの「繰り返し」[9]とは、(9)(10)のように同一の動作・出来事の反復を表すものである。eの「単なる状態」とは、(11)(12)のようにものの性質や状態、空間的な配置関係などを表すのに動詞が使われる場合、形容詞と同じ働きをするもので、その状態を引き起こした動作・作用の過程が問題にならないものである（吉川 1976）。

3.2 用いたデータ：作文コーパス

調査にあたっては「台湾人日本語学習者コーパス」（CTLJ）[10]を用い、台湾人日本語学習者の作文データを収集して検討した。CTLJには、2003 学年度から 2008 学年度までの、台湾の大学 13 校で日本語を学ぶ学習者の作文が、全部で 22 種類のテーマで 1563 篇収録されている。このうち、今回分析に用いたデータは「社会問題」というテーマのものである。その中から、旧日本語能力試験一級と二級合格者それぞれ 40 名ずつ（計 80 篇）、三級合格者を 18 名（計 18 篇）選択した。また、一級と二級合格者の人数に合わせるために、残り 22 名の三級合格者の作文データは筆者が 2012 年 10 月 7 日から 10 月 20 日までの間に、旧日本語能力試験三級のレベルに相当する新式の日本語能力試験N4 級を取得した大学

[8] 「パーフェクト」は「経験」（吉川 1976）、「回顧」（寺村 1984）とも呼ばれている。本稿では工藤（1995）に従い「パーフェクト」と呼ぶ。

[9] 「繰り返し」は「習慣」（菅谷 2004b、2005）や「反復・習慣」（副島 2007）とも呼ばれる。本稿では吉川（1976）に従い「繰り返し」と呼ぶ。

[10] CTLJ は“The Corpus of Taiwanese Learner of Japanese”の略称で、台湾成功大学外国語文学系の黄淑妙が作成したコーパスである。詳細は黄（2009）を参照。

生（台湾の大葉大学と中華大学の日本語専攻の学生）を対象に収集した[11]。全部で合計120名分、120篇の作文を対象とした。

3.3 分析の方法

調査の手順は、まず、作文の中でテイルが使用されたところ、及び使用すべきところを抽出した。抽出された部分を前後の文脈によって前述した「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」の5つの用法に分類した。その後、表1に示すように、それぞれ①正用、②非使用、③過剰使用の3つの使用状況に分け、延べ語数（token frequency）で各グループ（一級、二級、三級合格者）の文末と連体修飾節の両位置における用法別の正用と誤用の頻度を算出した。テイルの正誤用の判断と用法の分類は、日本語母語話者3人によって決定した。判断が異なる場合は、多数決によった。

表1 テイルの正用と誤用のパターンの定義と使用例

正用		例：毎日インタネットで新聞を<u>読んでいる</u>。(N1-1) 例：ペットを<u>飼っている</u>私にとっては、ペットは自分との「繋がり」だ。(N1-7)
誤用	非使用	テイルを使用すべきところに使っていないもの
		例：私は日本へ遊びに行きとき、多い人は自転車に<u>乗ります</u>。（→乗っていました）。(N3-10) 例：最近、よくテレビの報道に<u>出た</u>（→出ていた）ニュースの内容はほとんど物価や石油の高騰にかかるのだ。(N2-31)
	過剰使用	テイルを使用すべきではないところに使用したもの
		例：(前略)自分の子供はひどいことをした時、承認できないて自分の子供のために積極的に<u>弁解しています</u>（→弁解します）。(N3-33) 例：国内の教育制度によって、(中略)それ以上の長い期間に教育を<u>受けていた</u>（→受ける）ことが常態になってきたようです。(N1-11)

注1：二重下線の部分は「テイル」に関する学習者の誤用であり，( )内は筆者による訂正である.
注2：「N1-1」の「N1」は一級合格者を指し，「1」は作者番号を示すものである. 以下同様.

その上で、文末と連体修飾節における台湾人日本語学習者のテイルの習得状況を検討するため、以下の2つの手順で分析を行った。第一に、文末と連体修飾節における学習者のテイルの用法別の使用傾向を考察するために、カイ二乗分布を用いた「適合度検定（chi-square test of goodness-of-fit）」と「独立性の検定（chi-square test of independence）」で検

[11] 新・旧日本語能力試験の各レベルの比較と対照については日本語能力試験公式サイト（http://www.jlpt.jp/about/pdf/comparison01.pdf）を参照。

討した[12]。第二に、「テイルの用法」と学習者の「日本語レベル」の2つの要因が、文末と連体修飾における学習者のテイルの正誤用と誤用パターン（非使用と過剰使用）にいかに影響しているかを考察するため、「決定木分析（decision tree analysis）」の一つである「分類木分析（classification tree analysis）」で検討した[13]。また、データの分析には、IBM SPSS Statistics version 19.0JとIBM SPSS Decision Trees version 19.0J (SPSS Inc. 2010)を用いた。

4. 分析結果

4.1 文末と連体修飾節の違いによるテイルの用法別の使用傾向

ここでは、文末と連体修飾節における学習者のテイルの用法別の使用傾向について考察した。両位置におけるテイルの用法別の使用頻度を表2にまとめる。

表2 文末と連体修飾節によるテイルの用法別の使用傾向

	動作の持続		結果の状態		パーフェクト		繰り返し		単なる状態		適合度検定の結果
	使用頻度	比率	使用頻度	比率	使用頻度	比率	使用頻度	比率	使用頻度	比率	
文末	146	52.7%	63	22.7%	9	3.2%	45	16.2%	14	5.1%	$x^2(4)=220.960,\ p<.001$
連体修飾節	53	58.9%	15	16.7%	2	2.2%	12	13.3%	8	8.9%	$x^2(4)=90.333,\ p<.001$
合計	199	54.2%	78	21.3%	11	3.0%	57	15.5%	22	6.0%	
独立性の検定の結果			$x^2(4)=3.935,\ p=.415,\ ns$								

注：各項目の使用頻度は，延べ語数によって集計したものである．

表2に示したように、文末と連体修飾節という統語的位置の違いによるテイルの用法別の使用傾向に差異があるか否かを検討するために、カイ二乗分布を使った独立性の検定を行った。その結果、有意差が認められなかった[x^2 (4)=3.935, p<.415, ns]。このことから、文

[12] 「適合度検定」は、観測された頻度分布が確率分布と同じであるかどうかを検定するものである。一方、「独立性の検定」は、2 変数のクロス集計表に基づき、2 変数間の関連性を調べるものである。両者ともカイ二乗(x^2)分布と呼ばれる理論上の分布に漸近的に従う検定統計量を用いた統計的仮説検定の総称である、「カイ二乗検定(chi-square tests)」に含まれる種々の検定の一つである（玉岡 2012）。

[13] 「分類木分析」は複数の独立変数によってある一つの従属変数を予測する多変量解析の一つである。「分類木分析」では、上記の①「統語的位置」、②「テイルの用法」、③「日本語レベル」の 3 要因を同時に考察することができる。その結果は樹形状に描かれ、有意な影響を持つ要因が強いものから順に現れるので、複数の要因の階層性を視覚的に検討できる。詳細は玉岡(2012)を参照。

末と連体修飾節の両位置における学習者のテイルの用法別の使用傾向に変わりのないことがわかった。しかし、文末と連体修飾節の両位置おいて、5つの用法のいずれかに偏って用いられるか否かを、カイ二乗分布を使った適合度検定で分析した。その結果はいずれも有意となり、文末と連体修飾節ともある特定の用法に偏って用いられる傾向が見られた。具体的にどの用法が有意に多く用いられたかを検討するために、さらに両位置における5つの用法の使用頻度を２つずつ組み合わせて適合度検定で比較した結果、文末[$x^2(1)=32.962$, $p<.001$]と連体修飾節[$x^2(1)=21.235$, $p<.001$]のいずれにおいても、「結果の状態」よりも「動作の持続」のほうがより多く用いられることがわかった。換言すれば、連体修飾節におけるテイルの用法別の使用傾向は、文末の場合と同様に5つの用法の中で最も多く用いられたのは「動作の持続」の用法である。

4.2　文末と連体修飾節における「日本語レベル」と「テイルの用法」の影響

文末と連体修飾節の両位置において、テイルの用法別の使用状況にいかなる共通点と相違点があるか、およびそれは学習者の日本語レベルの違いによっていかなる変化があるかを検討するために、統語的位置（「文末」、「連体修飾節」）、学習者の日本語レベル（「一級合格者」、「二級合格者」、「三級合格者」）、テイルの用法（「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」）の3つの変数で学習者のテイルの正誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。文末と連体修飾節という統語的位置を最初の変数に設定して分析した結果、図1のデンドログラムが得られた。なお、本分析の相対リスクは20.7%であった。

図1のデンドログラムを見ると、文末と連体修飾節の統語的位置、学習者の日本語レベル、テイルの用法の３要因とも学習者のテイルの使用に有意な影響力を持っていることが示されている。まず、最初の変数[14]として設定された文末と連体修飾節の両位置におけるテイルの正誤用の比較結果では、文末（ノード1，正用率が 76.2%）よりも連体修飾節におけるテイルの正用率（ノード2，正用率が 85.7%）が有意に高かった[$x^2(1)=4.050$, $p<.05$]。つまり、文末よりも連体修飾節における学習者のテイルの習熟度がより高いことがわかった。なお、文末と連体修飾節の両位置におけるテイルの使用頻度から見ると、連体修飾節での

[14] 分類木分析である特定の独立変数を最初の変数に設定していない場合、分析の結果はテイルの正誤用に有意な影響を持つ要因（独立変数）が強いものから順に現れる。しかし、本研究では文末と連体修飾節におけるテイルの用法別の使用状況の比較検討が目的なので、文末と連体修飾節の「統語的位置」を最初の変数に設定して分析を行った。

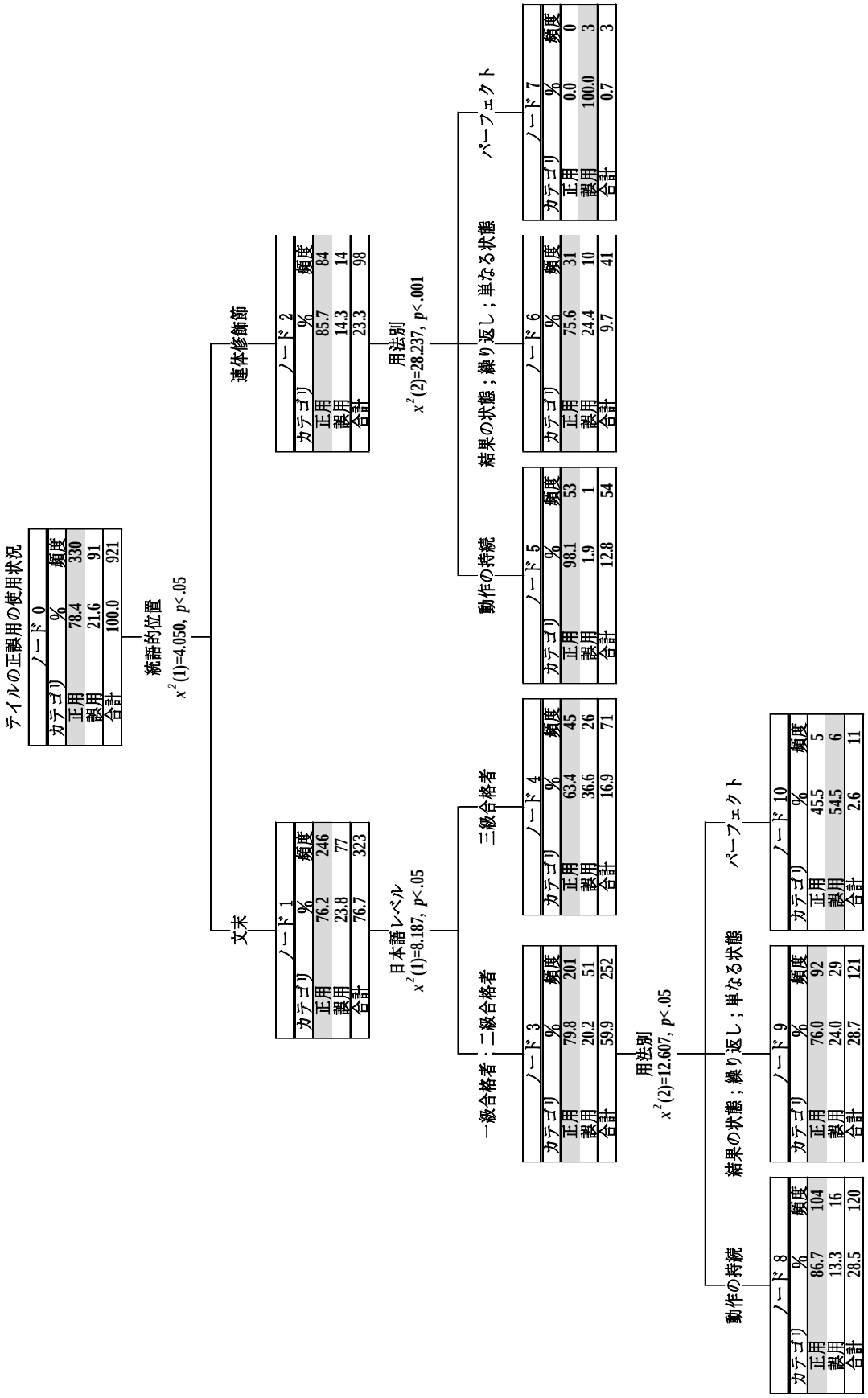

図1 文末と連体修飾節における「テイルの用法」と「日本語レベル」の影響についての分類木分析の結果

テイルの使用頻度は僅か文末の3割弱であったため、これはおそらく両位置におけるテイルの使用頻度の顕著な差異による可能性があると思われる。また、図1に示されているように、統語的位置の違いによって異なる影響要因が現れた。まず、文末において学習者の「日本語レベル」と「テイルの用法」の2つの要因の影響が見られ、「テイルの用法」よりも学習者の「日本語レベル」の影響が学習者のテイルの使用により強く影響していることがわかった。学習者の日本語レベルで分けた3つのグループのうち、「一級合格者」と「二級合格者」の2つのグループの間に正誤用の差異は認められなかったが、この2グループの正用率の平均値（ノード3, 正用率が79.8%;）が、「三級合格者」（ノード4, 正用率が63.4%）のグループよりはるかに高いという有意差が示されている[x^2 (1)=8.187, p<.05]。これは、学習者の文末でのテイルの習得状況は中級段階からあまり伸びていないということを意味している。また、3つのグループのうち、ノード4の「三級合格者」を除くほかの2つのグループは、「テイルの用法」の違いによる影響を受けている[x^2(2)=12.607, p<.05]。ここでは、「動作の持続」（ノード 8, 正用率が 86.7%）の正用率が最も高く、それに次いで「結果の状態」、「繰り返し」、「単なる状態」の3用法（ノード9, 正用率が 76.0%）と続き、いずれも7割以上の高い正用率を占めている。これに対し、「パーフェクト」（ノード 10, 正用率が 45.5%）の正用率は5割にも達しておらず、他の用法と比べると極めて低いという結果が示されている。一方、連体修飾節においては「テイルの用法」の影響しか認められなかった[x^2(2)=28.237, p<.001]。言い換えれば、学習者の日本語レベルの違いは連体修飾節におけるテイルの使用に影響しない。連体修飾節でのテイルの習得状況について、5つの用法の中で正用率が最も高いのは「動作の持続」（ノード5, 正用率が 98.1%）の用法であり、続いて「結果の状態」、「繰り返し」、「単なる状態」の3用法（ノード6, 正用率が 75.6%）であり、そして、正用例は1例も見られずに正用率が最も低いのは「パーフェクト」（ノード7, 正用率が 0%）の用法であった。以上により、連体修飾節中でのテイルの用法別の使用状況は文末の場合と同じであることがわかった。

4.3 テイルの誤用パターンについて

テイルの誤用パターンに影響する要因を検討するために、「統語的位置」、「日本語レベル」、「テイルの用法」の3変数でテイルの誤用パターン（非使用と過剰使用）の頻度を予測する分類木分析を行った。その結果は、図2に示した。なお、本分析の相対リスクは34.1%であった。

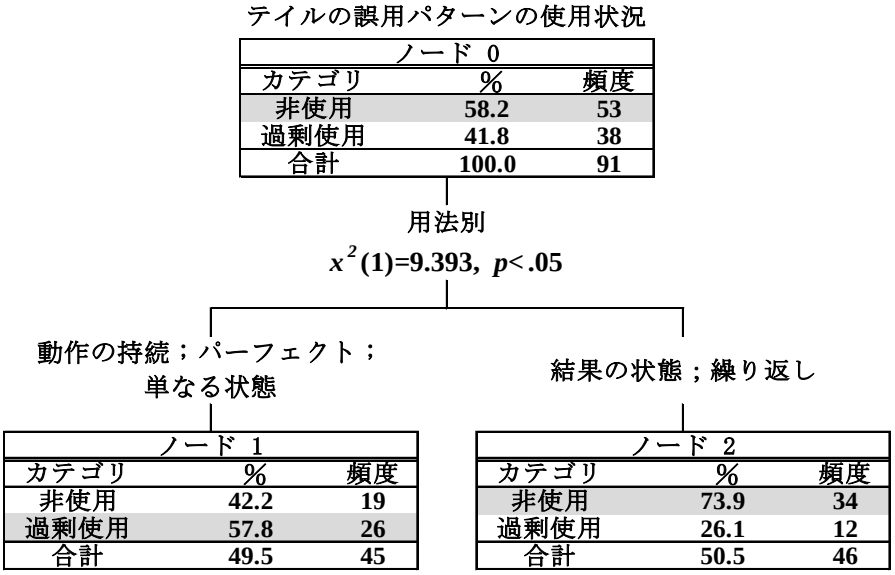

図2 テイルの誤用パターンに影響する3要因についての分類木分析の結果

図2を見ると、上記の3つの要因の中で「テイルの用法」の違いによる影響しか見られない。このことから、文末と連体修飾節の「統語的位置」と学習者の「日本語レベル」の2要因は学習者のテイルの誤用パターンに影響しないことが判明した。要するに、この3要因のうち、学習者のテイルの誤用パターンに最も強く影響する要因は、テイルの用法の違いであることがわかった。図2に示されているように、調査全体としては、テイルの誤用パターンについて非使用の頻度は 53 回で全体の 58.2%であるのに対し、過剰使用の頻度は 38 回で全体の 41.8%であった。5つの用法は誤用パターンの違いによって2つの子ノードにわかれた。その中で、ノード1に含まれた「動作の持続」、「パーフェクト」、「単なる状態」の3用法（非使用率が 42.2%；過剰使用率が 57.8%）では、非使用と過剰使用の間に有意差が見られなかったに対し、ノード2に含まれた「結果の状態」と「繰り返し」の2用法（非使用率が 73.9%；過剰使用率が 26.1%）では非使用の比率が圧倒的に高かった、という異なる誤用パターンが示されている[$x^2(1)=9.393, p<.05$][15]。

5. 考察

[15] 「動作の持続」、「パーフェクト」、「単なる状態」の3用法での「非使用」と「過剰使用」の頻度を適合度検定で分析した結果は有意差が見られなかったが[$x^2(1)=1.089,\ p=.297,\ ns$]、「結果の状態」と「繰り返し」の2用法での誤用パターンの比較結果は、「非使用」のほうが有意に高かった[$x^2(1)=10.522, p<.01$]。

5.1　文末と連体修飾節で見られたテイルの習得状況と共通点

以上、文末と連体修飾節における学習者のテイルの習得について、テイルの用法と学習者の日本語レベルの2つの要因の影響の仕方に焦点を置き、テイルの使用傾向と正誤用の2つの使用状況から検討した。その結果、文末と連体修飾節における学習者のテイルの用法別の使用状況に2つの共通点が見られた。第一に、学習者のテイルの用法別の使用傾向は文末と連体修飾節の統語的位置の違いに関わらず似通っている。両位置のいずれにおいてもテイルの使用の半分以上は(13)(14)のような「動作の持続」の用法(表2，文末での使用率が 52.7%；連体修飾節での使用率が 58.9%)に集中していることが観察された。

(13) 私は今、喫茶店でバイドしている。(N2-40)
(14) 私が生活している台湾は、メディアの乱用が問題になっています。(N3-17)

第二に、文末と連体修飾節におけるテイルの用法別の習得順序が一致している。前節では、テイルの用法と学習者の日本語レベルの2要因が、文末と連体修飾節におけるテイルの正誤用に影響する仕方について検討した結果、2要因ともテイルの使用に有意な影響力を持っていることが判明している。しかし、文末と連体修飾節の統語的位置の違いにより、この2要因は学習者のテイルの使用に影響する度合いが異なっている。文末において、この2要因のうち、学習者の日本語レベルの違いによる影響はテイルの用法よりも強く、学習者のテイルの使用に影響する主要な要因であったのに対し、連体修飾節においては学習者の日本語レベルの違いによる影響が見られず、テイルの用法の影響しか認められなかった。文末での学習者のテイルの習得状況については、初級段階から中級段階まで学習者のテイルの習得はかなり進んでいたが、中級段階以後、学習者は日本語レベルが上級段階に達してもテイルの習得状況は顕著な伸びが見られなかった。また、初級段階においては5つの用法の正誤用に明確な差異は現れなかったが、中上級段階においてはテイルの用法の違いによる有意な影響が見られた。この場合、5つの用法のうち、台湾人日本語学習者にとって、最も習得しやすいのは「動作の持続」であり、次いで「結果の状態」、「繰り返し」、「単なる状態」の3用法となり、最も習得しにくいのは「パーフェクト」である、という習得順序が明らかになった。一方、連体修飾節では、学習者の日本語レベルの違いにかかわらず、文末の場合と一致したテイルの用法別の習得順序が示された。実際の日本語教

育の現場では、連体修飾節におけるアスペクト形式の指導について、文末でのアスペクト形式をそのまま埋め込んで一つの文にする指導法が採られている[16]（塩川 2007）。そのため、学習者は文末でのテイルの用法別の使用を連体修飾節に直接応用する可能性があると考えられる。文末と連体修飾節における5つの用法の正用例は下記のように示した[17]。

［結果の状態］

(15) 最近、物価があがっています。(N3-1)

(16) 実際に考えてみると、今、社会に立っている人は少なくとも責任心を取るはずがあると思っている。(N2-29)

［パーフェクト］

(17) 今、新聞によって、つねに大学から卒業したばかりの学生が勉強不足だのことを指摘されている。(N1-37)

［繰り返し］

(18) 毎日インタネットで新聞を読んでいる。(N1-1)

(19) テレビに毎日放送されているニュースの内容は大抵真実のようにおそろしい殺人事件、（中略）自殺現場などの社会の暗さを含んでいる。(N2-29)

［単なる状態］

(20) 政治人物のスキャンダルばかりで、どうでもいい情報が溢れている。(N1-17)

(21) さらに遠く離れている人の声が聞こえる。(N3-34)

以上により、連体修飾節におけるテイルの習得は、用法別の使用傾向においても習得順序においても、いずれも文末でのテイルの習得と同じであることが示されている。このうち、文末と連体修飾節におけるテイルの用法別の習得順序が一致することは、許（2009）の調

[16] 例：ある人は鈴木さんです。メガネをかけています。→あのメガネをかけている人は鈴木さんです（塩川 2007：100）。

[17] 文末・連体修飾節における「動作の持続」の正用例は前掲した（13）と（14）を参照。また、4.2 節での分析結果（図1）に示されているように、連体修飾節における「パーフェクト」の正用例は1例も見られないため、ここでは欠けている。

査と異なる結果が出ている。

5.2　文末と連体修飾節におけるテイルの用法別の誤用パターン

テイルの誤用パターン（非使用と過剰使用）の分析結果では、文末と連体修飾節の位置、テイルの用法、学習者の日本語レベルの3つ要因の中で、テイルの用法の違いによる影響しかみられなかった。このうち、学習者のテイルの誤用パターンに文末と連体修飾節の位置の違いによる有意な影響が見られなかったことからも、学習者は文末でのテイルの使用をそのまま連体修飾節に埋め込む、という使用状況が窺える。なお、実際に作文データで取り上げられた連体修飾節の誤用例は僅か 14 例しかないために分析結果に影響する可能性があると思われる。テイルの5つの用法が誤用パターンの違いによって2つのグループに分けられる。一つは、非使用と過剰使用に明確な差のない「動作の持続」、「パーフェクト」、「単なる状態」の3用法である。もう一つは、非使用率が極めて高い「結果の状態」と「繰り返し」の2用法である。グループ別で各用法の文末と連体修飾節における非使用と過剰使用の比率は表3のようにまとめられた。

表3　文末と連体修飾節における用法別の誤用パターンの比率

誤用パターンで分けたグループ	用法	文末		連体修飾節	
		非使用	過剰使用	非使用	過剰使用
グループ1	動作の持続	40.7%	59.3%	100.0%	0.0%
	パーフェクト	50.0%	50.0%	33.3%	66.7%
	単なる状態	50.0%	50.0%	0.0%	100.0%
グループ2	結果の状態	72.0%	28.0%	75.0%	25.0%
	繰り返し	76.9%	23.1%	75.0%	25.0%

注: 各項目の比率は，延べ語数によって算出したものである.

分類木分析の結果では文末と連体修飾節の違いによる有意な影響はないことが判明したが、表３を見ると、用法別によって文末と連体修飾節における誤用パターンにいくつかの類似点と相違点が見られた。まず、グループ1の3用法において「動作の持続」を除けば、「パーフェクト」と「単なる状態」の2用法では文末と連体修飾節での誤用パターンを比較すると、いずれの用法においても文末では非使用（例（24）（27））と過剰使用（例（25）（28））が半々の比率をなすのに対し、連体修飾節では（26）（29）のように過剰使用の比率

が比較的高い、という同様の誤用パターンが観察された。一方、「動作の持続」の用法において、文末では過剰使用がより頻繁に起こっているのに対し、連体修飾節では非使用しか見られなかった。また、その誤用例を見ると、「動作の持続」の過剰使用は（22）のようにほとんど「思う」の誤用（「思う」による過剰使用率が 81.25%）に集中しているのが観察された。さらに、連体修飾節での「動作の持続」のただ1例の誤用例も（23）のような「思う」による非使用である。これらのことから、「思う」のような心理動詞のテイルの使用は単に動きの時間的局面を表すわけではなく、人称やムードの違いも関わるのでよく難しくなるため、学習者にとって文末と連体修飾節に拘わらず混乱しやすい項目であることがわかった。

［動作の持続］

(22) （前略）一方、そのようなコースの目的は学生たちの基本的な知識を培うことだと考えている人もいる。両方の意見は不正確なところはないと思っている（→思う）。(N1-15)

(23) 台湾は元々主に国際貿易で金を得るから、各国の情報も必ず知るのは無論だと思う。けれども、私は最近の記者達がそう思わない（→思っていない）ことを感じた。(N1-1)

［パーフェクト］

(24) 以前、公立図書館についての記事を読んだことがあります。管理をよくしていないようで、きたないし、うるさいと書かれました（→書かれていました）。(N1-11)

(25) 教育について、再来年は新しい制度が行われています。（→行われる）。(N3-24)

(26) それは、視障者を助けるために訓練を受けた犬「クィール」、仔犬から大きくなるまで、視障者の主人との生活を撮っていた（→撮った）映画だった。(N1-7)

［単なる状態］

(27) 現に、環境を守らなければならない。人々はいろいろな努力するが、多くの人はまだ意識しない（→意識していない）。環境の大切さについて。(N2-11)

(28) 謝氏は馬氏のグリーンカードのことに「興味」があり、（中略）どうして、国への理想こういう意見を重視していなかった（→重視しない）だろうか。(N2-24)

(29) そしたらいつか、この社会はトップの学生を批判することを一つの面白いことだと思

っていない（→思わない）時が来るのだろうか。(N1-20)

一方、グループ2に属する「結果の状態」と「繰り返し」の2用法では、下記の（30）～（33）のように、文末においても連体修飾節においても、いずれも非使用率のほうが比較的高いことが観察された。

［結果の状態］

(30) 今の学生の教育の品質がどんどん下がっていると思います。その原因は大学の学校が増えていって（→増えているのに）、学生の人数が少なくなります（→少なくなっています）。(N2-39)

(31) 2008 年に迎えた今、環境の破壊が悪くなる一方だ。多くの国が環境問題に取りかかったにもかかわらず、さらに深刻になる（→深刻になっている）のが実態である。(N1-31)

［繰り返し］

(32) たとえば、電車の駅の中に、「セクハラを止めよう」という知らせがあるけど、まだ痴漢の事件がどこでもおこってくる（→起こっている）。(N2-30)

(33) 最近、よくテレビの報道に出た（→出ていた）ニュースの内容はほとんど物価や石油の高騰にかかるのだ。(N2-31)

6. おわりに

本研究では、文末と連体修飾節という統語的位置の違いが日本語学習者のテイルの使用にいかに影響しているかを考察するために、両位置におけるテイルの用法と学習者の日本語レベルの2つの要因の影響の仕方と相互作用に焦点を置き、台湾人日本語学習者の作文データを用いて分析を行った。その結果、以下の2点が明らかになった。

1. 文末と連体修飾節のいずれの位置においても、テイルの使用が「動作の持続」に偏って用いられという使用傾向がある。
2. 連体修飾節におけるテイルの用法別の習得順序は文末の場合と一致している。5つ

の用法の中で最も習得されやすい用法は「動作の持続」であり、これに「結果の状態」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つが同程度で続き、最も習得が難しいのは「パーフェクト」である。

以上のように、文末と連体修飾節における台湾人日本語学習者のテイルの習得は、学習者の日本語レベルによる影響の仕方が異なるものの、両位置のいずれにおいても一致した使用傾向と習得順序が示されている。今回の調査結果を踏まえ、今後は本研究で考察したテイルの用法別の習得状況の他に、テイルの使用された動詞に内在する語彙的アスペクトの違いによる影響も取り上げ、テイルの習得に影響する仕方を比較検討してより議論の幅を広げていきたい。また、3.1 節で取り上げたテイルの5つの用法のうち、連体修飾節において、「動作の持続」と「繰り返し」の2用法を表す場合、下記の（4′）（10′）のようにテイルをルに入れ替えることが可能であるが [18]、タに入れ替えると過去に起こった動作・出来事を表すことになる。一方、「結果の状態」、「パーフェクト」、「単なる状態」の3用法を表す場合、（6′）（8′）（12′）のようにテイルをタで置き換えられるが、これらの例文をルにすると、非文法的な文が生じる [19]。

（4′）英語を{学ぶ／#学んだ}小学生が多い [20]。[動作の持続]
（6′）{*汚れる／汚れた}服は水につけておきなさい。[結果の状態]
（8′）既に高校を{*卒業する／卒業した}方の応募も受け付ける。[パーフェクト]
（10′）毎日コーヒーを{飲む／#飲んだ}人は脳卒中リスクが低下する。[繰り返し]
（12′）軽油よりもバイオ燃料の方が{*優れる／優れた}点が多い。[単なる状態]

このように、連体修飾節中でのルとタの使用の違いは、学習者の連体修飾節の習得にいか

[18] ただし、「動作の持続」の用法では、目の前での進行中の動作・出来事を表す場合、下例のようにテイル形しか使えない。
そこで本を{*読む／読んでいる}人は太郎です。

[19] ただし、「単なる状態」を表す場合、「存在する、異なる、属する、違う」のような存在や関係などの状態的な意味しか持たない動詞は、連体修飾節において若干ニュアンスが異なるが、ルとタの両方とも表せる（金水 1994：56）。
(i) {異なる／異なった}種類の問題
(ii) ひと味{違う／違った}味噌
(iii) {関連する／関連した}事件

[20] 「#」は文法的には正しいけど、テイルの置き換えとしては使えないことを表す。

なる影響を与えるかについても重要な研究課題であるため、考察対象としては「非完成相（テイル・テイタ）」のみならず、「完成相（ル・タ）」の習得状況も考慮に入れ、第二言語としての日本語のテンス・アスペクトの習得のメカリズムの解明を試みたい。

［参考文献］

庵功雄（2001）「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4, pp.75-94.

伊藤創（2011）「連体修飾節におけるル形、タ形についての一考察―学習者への提示のあり方について―」『国際研究論叢』24-2, pp.193-208.

奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって（上）」『教育国語』53, pp.33-44.

奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって（下）」『教育国語』54, pp.15-27.

大津敬一郎（2004）「連体修飾とは何か」『日本語学』23-3, pp.6-16.

許夏珮（1997）「中・上級台湾人日本語学習者による「テイル」の習得に関する横断研究」『日本語教育』95, pp.37-48.

許夏珮（2000）「自然発話における日本語学習者による「テイル」の習得研究―OPI データの分析結果から―」『日本語教育』104, pp.20-29.

許夏珮（2005）『日本語学習者のアスペクトの習得』くろしお出版.

許夏珮（2009）「連体修飾節におけるテイルの習得」『東呉日本語教育学報』32, pp.53-80.

金水敏（1994）「連体修飾の「～た」について」田窪行則（編）『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版, pp.29-65.

金春女（2007）「連体修飾節における「～タ」形と「～テイル」形について―述定性という観点から―」『言葉と文化』8, pp.157-172.

工藤真由美（1982）「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4, pp.51-88.

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房.

黒野敦子（1995）「初級日本語学習者におけるテイルの習得について」『日本語教育』87, pp.153-164.

小山悟（2004）「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個別性−母語の役割と影響を中心に−」小山悟・大友可能子・野原美和子（編）『言語と教育：日本語を対象として』くろしお出版, pp.153-164.

小熊利江・品川直美・山下直子・米沢久美子（1998）「連体修飾の使用状況に関する一考察」『言語文化と日本語教育』16, pp.70-79.

黄淑妙（2009）『日本語習得の達成度分析―「台湾人日本語学習者コーパス」(CTLJ)の構築と分析を中心に―』致良出版社, pp.213-236.

白井恭弘（1998）「第 3 章　言語学習とプロトタイプ理論」奥田祥子（編）『21 世紀の民族と国家　第 8 巻　ボーダーレス時代の外国語教育』未来社, pp.69-108.

白井恭弘（2004）「非完成相『ている』の意味決定における瞬間性の役割」佐藤滋・堀江薫・中村渉（編）『対照言語学の新展開』ひつじ書房, pp.71-99.

塩川絵里子（2007）「日本語学習者によるアスペクト形式「テイル」の習得―文末と連体修飾節との関係を中心に―」『日本語教育』134, pp.100-109.

菅谷奈津恵（2002）「日本語のテンス・アスペクト習得に関する事例研究―自然習得をしてきた露・英・仏語母語話者を対象に―」『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』平成 12-13 年度科学研究費研究成果報告書, pp.102-114.

菅谷奈津恵（2003）「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究―「動作の持続」と「結果の状態」のテイルを中心に―」『日本語教育』119, pp.65-74.

菅谷奈津恵（2004a）「文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究−L1 の役割の検討」『日本語教育』123, pp.56-65.

菅谷奈津恵（2004b）「初級日本語学習者のテイルの習得に関する縦断研究―マラティ語、テルグ語母語話者の場合」『言語文化と日本語教育』27, pp.170-181.

副島健作（2007）『日本語のアスペクト体系の研究』ひつじ書房.

玉岡賀津雄（2012）「統計」近藤安月子・小森和子（編）『研究社日本語教育事典』研究社, pp.317-336.

田中道治(2010)「連体修飾節の「テイル」と「タ」―その教育―」『日本語・日本文化研究』16, pp.42-57.

陳建瑋（2012）「台湾人日本語学習者によるテイル用法別の習得研究―「台湾人日本語学習者コーパス」に基づく縦断調査―」『台湾日本語文学報』31, pp.127-152.

寺村秀夫（1978）『日本語教育指導参考書5　日本語の文法（下）』国立国語研究所.

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.

寺村秀夫（1993）『寺村秀夫論文集Ⅰ―日本語文法編―』くろしお出版.

中畠孝幸（1995）「現代日本語の連体修飾節における動詞の形について―ル形・タ形とテイ

ル形・テイタ形―」『人文論叢：三重大学人文学部文化学科研究紀要』12, pp.23-32.
中畠孝幸（1994）「連体修飾と動詞の形」『三重大学日本語学文学』5, pp.27-36.
吉川武時（1976）「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦（編）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, pp.155-327.
Shirai, Y. & Kurono, A. (1998) The acquisition of tense-aspect marking in Japanese as a second language. Language Learning, 48, 245-279.